

山登りに 史跡の峠道 を歩く

ふるば

西武秩父線に乗って顔振り峠に山行をした折のこと、駅前の道路際に「吾野宿」という立札が立っていた。川沿いの路に沿って宿場跡の風情があって、そのような雰囲気漂っている。山道には少し遠回りとなるのだが、その街道沿いを歩いて行くと何軒かの宿舎か旅館のような家並みが向かい合って軒を連ねている。中には古びてはいるが厚い黒塀と戸板の門構えの屋敷風の家があり、屋根には立派な鬼瓦が載っていた。これは間違いなく昔の宿場町に相違ない。今は閑散として人が住んでいるのか居ないのかシャッター街に近い状態だが、嘗ての雰囲気をそれとなく残している。

宿場ということは街道沿いあったということだろうから、何処の街道だろうかと興味が沸いてきた。場所的には秩父街道だろうと思うが、路線で言うと大宮を通る中山道や川越街道にも近いのかなと考えた。もと旅籠風の鄙びた建屋は雨戸を締め切っているが、それでも身だしなみを整えて清楚な雰囲気を辺りに残している。落ち着いた街並みだ。登山客などがもっと多く立ち寄れる店屋があれば良いのに、と思うのだった。しかし、そんな名残を惜しむ気配を吹き飛ばすように、秩父方面から砂利を運ぶ碎石トラックが何台も連なって轟音と砂煙を挙げて走り抜けて行った。

宿場や街道というと、あとに続いて峠という言葉が出てくる。その昔から旅人が慣れ親しんだ言葉だが今は死語に近い。だが歴史を語る上では重要な位置を占めており、史跡探訪などでは貴重な拠点になる。近ごろ司馬遼太郎の歴史小説「街道を行く」のシリーズを読み始めた。読み始めたというよりも時間が出来ればそのうちに読もうと、楽しみに取って置いた文庫本を、その時期が来たので手に取ったというのが正しいところだ。

「街道を行く」シリーズを読んでいるが、峠という名称が彼方此方に出てくる。「峠を行く」というタイトルに代えても良いのではないのかと思えるほどである。尤も小説で新聞に長く連載された「峠」や「大菩薩峠」が著明だが、小説の「峠」に出てくる実際の峠は上信越自然歩道にある三国峠と、群馬県安中市松井田町坂本と長野県北佐久郡軽井沢町との境にある碓氷峠に当たるそうだ。何れも一度ならず自分の足で通ったか、近くを車で通っているところで親近感がある。

今、登っている顔振り峠の近くにも峠と呼ばれる場所が沢山ある。顔振り峠に近く同じ山群にある正丸峠、高麗峠、天目指峠、豆口峠などがそうだ。少し足を左右に延ばすと大菩薩峠、三国峠、夜叉陣峠、小仏峠、大ダルミ峠などが見えてくる。どこも一度は通ったか以前に通った記憶のある所だ。

峠というところは人の往来が歴史的にも深く刻みつけられているところで、今回登ってきた顔振り峠というところは、源義経が奥州へ逃げる際に、あまりの絶景に振り返ってみたことに由来する、



(顔振り峠)

と地名の由来に書かれていた。峠の茶店は平九郎茶屋と言って、かつて戊辰戦争の一つであった「飯能戦争」が起きた際に、彰義隊分派の参謀だった渋沢栄一の養子である渋沢平九郎が戦いに敗れて逃走中に立ち寄って名付けた屋号で、平九郎はこの茶屋で一服した後に、黒山に降る途中で見つかって自害したとのこと。そんな歴史の踏み後を辿ることが出来るのが「峠」というところだろう。

この辺り、秩父山塊は古くから秩父の織物を通して江戸との往来が盛んだったところである。今は人の訪ねることが少なくなったようで、山の茶店で聞くと林道を走るのは自転車ツーリングが一番多いと

のこと、要は車の往来が少ないので自転車ツアーにはもってこいの場所になっているようだ。登山道もしっかりと整備されているが平日の登山客は数えるほどのことは無い。自分はほぼ毎週のように道を選んで登っているが人と出会うことは少ない。幸いなるかなである。

往時、江戸との往来が盛んだった秩父は三十四ヶ所の巡礼が距離的にも江戸から一番近かったということで、西国三十三ヶ所や坂東三十三ヶ所霊場よりも参詣者の人数が多かったと記録されている。そんな秩父には江戸から街道があったに違いが無いだろうと調べてみると、荒川沿いに秩父までの街道があったことが判る。江戸から秩父へのルートとして、現在の豊島区東池袋を起点とする川越街道からほぼ東武東上線に沿って川越、高坂、小川を経て、秩父往還に入って、粥仁田 [かゆにた] 峠／(標高 538m)、吾野、正丸峠 (650m) へと続いていたようだ。そういえば正丸峠と伊豆ヶ岳の分岐点には道標としての馬頭観音があった。そうだ、顔振峠の山道にも確かあったなと思って確認すると「顔振茶屋」の脇に観音立像が立っていた。

ふと見ると茶色い蝶が舞っている。黒い羽先が見えるのでたぶんツマグロヒョウモンだろう。遠いところまで来たものだ、本来は南方系の蝶で以前は関西以西にしか生息しなかった蝶だ。温暖化の影響かも知れないが峠を越えるのは人も蝶も同権らしい。今度は会山行で笛吹峠 (岩殿丘陵、埼玉県) に行くことになっているので楽しみにしている。

ところで漢字の‘峠’というのは表語文字で文字の形が実態の形状をよく表現している。しかし表音文字である英語には峠に適した単語を見つけることができない。



(完)